

# 校長通信

## Morifun

### <コロナ禍の中の学校行事>

#### 体育祭～コロナに負けるな！盛附の団結力！～

考查明けの6月21日、22日の2日間体育祭が行われました。今年度も初日は運動公園でリレーや借り物競争などトラックを中心に、午後からは体育館でボールゲームを中心に熱戦が繰り広げられました。一番盛り上がったのはサッカー場でのクラス対抗綱引き、3年4組の圧勝でした。天候にも恵まれ、充実の2日間となりました。

#### 令和3年度体育祭試合結果

男子 【総合】①3-3 ②2-3 ③2-2

【サッカー】①3-3 ②2-4・5 ③2-2、2-3

【バレーボール】①2-3A ②1-3 ③2-1、3-3B

【バスケットボール】①3-3A ②2-1 ③2-2、3-3C

【バドミントン】①3-2 ②3-1 ③2-3、3-3A

【卓球】①2-2 ②2-3 ③1-3A、1-3B

女子 【総合】①1-4 ②3-4 ③3-2

【バレーボール】①3-4 ②2-5 ③3-2、2-4

【バスケットボール】①1-4 ②3-2 ③2-1、1-1

【バドミントン】①3-4B ②2-2 ③2-4、1-4

【卓球】①1-4 ②2-2 ③3-2、2-4C

【クラスTシャツグッドデザイン賞】 3-3

#### 遠足～7月5日(月)～無事決行

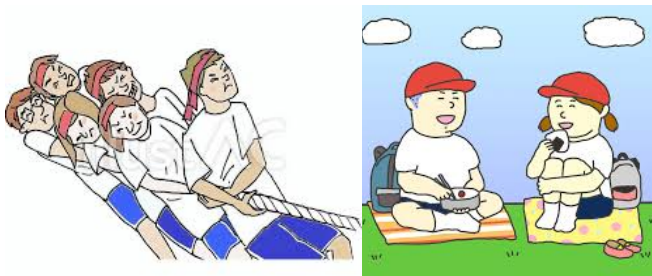
昨年度はコロナ禍のため見送った遠足も2年ぶりに行うことが出来ました。本来であれば5月の連休明けの予定でしたが、時期を先伸ばしての実施となりました。

1年生は陸前高田市で震災遺構を中心に語り部の方々のお話を伺い、釜石市では鶴住居復興スタジアムを見学。

2年生は宮古市、山田町を中心に三陸ジオパークの説明を含む防災学習そして鯨と海の科学館を見学。

3年生は小雨の中、葛巻高原で新エネルギー開発の講話・見学そして昼にはバーベキューで盛り上がりました。

特にも修学旅行が中止となったので、良い思い出作りとなったようです。皆さん、お疲れ様でした。



#### <6/8 全校礼拝より>

##### 新約聖書 ヨハネによる福音書 13章34-35節

前回のチャペル礼拝では、聖書が語る「愛」についてお話ししました。聖書が語る愛とは、相手の存在を重んじ、大切にすること。では、愛の反対は何でしょうか。それは、相手の存在を軽んじることではないかと思えます。私たちは人から「軽んじられた」と感じるとき、とても悲しい気持ちになります。心が深く傷つきます。それは子どもも大人も同様でありましょう。これは時代を超え、国境を越えた私たち人間の内にある普遍的な感情です。

私たちの社会においては、互いに互いを軽んじ合うことが起こってしまっています。私たち自身の内にも、相手を軽んじたい気持ち、排除したいという気持ちが生じてしま

うこともあるでしょう。そのような気持ちが生じること自体は悪いことではありません。人間として生きている限り、そのような否定的な気持ちが生じてくるのはむしろ当然のことだと思います。心の中で何を感じるかも、何を考えるかも私たちの自由です。

大切なのは、心の中に否定的な気持ちが生じたとき、その気持ちの赴くままに行動してしまうのか、それとも勇気を出して立ち止まって自らの内を顧みることができるか、でしょう。たとえ感情的には好きになれなくても、感情にまかせて相手を軽んじたり意地悪をしたりすることはしない。その気持ちをしっかりと持ち続けることができるかが問われているのだと思います。そしてその決意と姿勢が、相手を重んじ大切にすることにもつながってゆきます。

《あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。／互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる》(13章34-35節)。互いに愛し合うこと——言い換えると、互いに重んじあい大切にしようこと。これが、私たちが遵守すべき《新しい掟》であると語られています。

ここで前提となっているのは、イエス・キリストが、私たち一人一人を重んじて下さっているということです。聖書は、イエス・キリストが私たちを愛するゆえ——私たちの存在を極みまで重んじてくださるゆえ、私たちのために命を捨てて下さったことを記してしています。もちろん、相手のために命を捨てることは、イエス・キリストだからできたことです。私たちにはそれはできないし、またすべきではないでしょう。「愛する」ということの中には、自分自身を大切にすることも含まれているからです。

ここで言われているのは、私たちが互いを尊重し合い、重んじ合うことの大切さです。主イエスが私たちを重んじて下さっているように、私たちも互いに重んじ合うこと。その愛の道を歩もうとする人は誰でも、イエス・キリストの弟子であるのだと語られています。なかなか難しいことでもあるかもしれませんが、少しずつでも、日々の生活の

中でこのキリストの掟をいっしょに実践してゆきたいですね。(花巻教会牧師・鈴木道也先生)

## <部活動を振り返って②>

前回に引き続いての企画ですが、今回はまだまだ引退しない部の主将からのメッセージです。夏の高校野球大会も始まりました。柔道部は個人戦でインターハイに臨みます。陸上部は駅伝、サッカーも選手権を控えています。

質問内容は以下の通りです。

1 高総体を振り返って 2 部活動を振り返って

3 後輩へ一言

### 野球部 3年3組 田屋瑛人

1 満足のいく結果ではなかったが、全力を出し切れたので良かったと思う。

2 なかなか個性的な面々でまとまりはなかったけど、楽しかった。

3 頑張ってください。

### 柔道部 3年1組 伊藤匠

1 今回の高総体は、3年間の集大成の試合で、個人戦では決勝戦で戦う所まで来れて、2年前の1年生の時の1回戦敗退の時に比べて、技術も精神力も大きく成長出来て、試合では自分の柔道を出し切り、悔いの残らない試合が出来たので良かった。

2 1年生の時に、3年生に、3年間はあつという間だから、全部一生懸命に取り組んで悔いのないように頑張れと言われて、そんなことはないだろうと思っていたが、実際、自分が3年生になると本当にあつという間で、逆に足りないくらいだった、だけどこの短い期間で柔道部に入り、人としてのマナーや礼儀、考え方を教わることが出来て、人としてとても成長することが出来た。

3 まずは新人戦に向けて、一人一人がチームを引っ張っていくという気持ちと、常に練習することの意味を考えて練習に取り組んで、試合では盛附の柔道部というプライドと責任を持って挑んで、チームみんなで高総体の借りを返そう。

### 陸上部 3年1組 大宮大虎

1 高総体では5名の選手が東北大会出場を決めました。前回大会と比べると、東北大会出場者が0名から5名へと増え、躍進することができました。また東北大会出場できなかった選手の中には、走れなくなるまで戦った選手や、悔し涙を流す選手など、競技に対して本気で向き合った姿が見られました。

2 自分が入部したときより、練習の質も上がり、部員数も増えました。年々チームレベルが上がってきた自分のチームですが、全国大会出場経験がまだありません。全国につながる大会はまだあるので、これからまた精進していきます。

3 秋の駅伝シーズンまで部活は続きます。力を合わせて全国大会を勝ち取りに行きましょう。

### サッカー部 3年2組 剣持太洋

1 選手権、新人戦とベスト16で敗退してしまっていたので、高総体ではベスト8以上を目標にしていたのですが、またベスト16という悔しい結果になってしまいました。リーグ戦では2部リーグに昇格、選手権ではベスト8以上を目標に精進していきたいと思います。

## <今月お勧めの一冊>

「君たちは『同和』という言葉を知っているか？」

これは高校1年生の4月下旬頃のLHRでの担任からの問い掛けであった。担任というのは京都大学を卒業して、我々の高校入学とともに転任してきた20代後半の日本史が専門のN先生であった。生徒会誌『学園』の巻頭言に高校時代に人の話をちゃんと聴けなかったという話を書いたが、N先生からの、同和問題やその類の話は不思議とよく覚えている。その当時の我々にとって、それは初めて聞く言葉。その他にも、『部落差別』や『穢多・非人』など、かなり刺激的な言葉や単語が繰り返された。日本でも差別問題が存在すること、特に西日本ではいまだに多いこと、白土三平の『カムイ伝』という漫画に差別の歴史が描かれていること、在日朝鮮人が関東大震災時に虐殺されたこと、等。

担任ながら授業を持っていなかったN先生は、LHRの度に話をして聞かせて。中学3年生の時に『橋のない川』という映画を観ていた私は、あれが実は同和問題だったのだと知り、高1の夏休みに住井すゑの『橋のない川 第1部』(実は7部まである大作)を買って読み、読書感想文を書いた。明治時代後期の奈良県のある被差別部落が舞台で部落差別の理不尽さ並びに陰湿さが書かれている。

また、我々が通っていた高校には“学級読書会”という行事があった。これは1週間か2週間くらいかけて予め学級で選んだ課題図書を読み、LHRで感想などを話し合うという行事で、その年は島崎藤村の『破戒』を読んだ。同級生の中には面倒くさいと言って読まない輩も結構いたが、私は最初こそ嫌々ながら、でも途中からは引き込まれるように読んだことを覚えている。この作品は、「明治後期、部落出身の教員瀬川丑松が父親から身分を隠せと堅く戒められていたにもかかわらず、同じ宿命を持つ解放運動家、猪子蓮太郎の壮烈な死に心を動かされ、ついに父の戒めを破ってしまう。その結果偽善にみちた社会は丑松を追放し、彼はテキサスを目指して旅立っていく。」という、今風に言うと非常に重たい小説であった。担任からの強制ではなかったが、この作品を選んだのもしかしたらN先生への付度だったのかもしれない。「蓮華寺では下宿を兼ねた」という書き出しを今でも覚えている。

今までは比較的新しい本を紹介してきましたが、今回は私が高校時代に読んで、とても考えさせられた本を紹介しました。まさに温故知新ですね。

